

# 「ミステリ場」の構造分析

## ——新本格ムーヴメントを中心に——

法政大学大学院 山口敬大

### 1 目的

この報告の目的は、「場の理論」を援用することで、新本格ムーヴメントとはいかなるものであったのか、それを可能にした要因とは何かを明らかにすることである。本格ミステリとはミステリの中でもトリックを重視するものであり、新本格ミステリとは1987年に出版された『十角館の殺人』以後の本格ミステリを一般的には指し示す。

### 2 方法

P. ブルデュール社会学の功績の一つに「場の理論」がある。しかし、日本ではその経験的な蓄積が手薄である。本報告では理論の発展可能性に言及するためにも、市場からの相対的自律を含意する「場の理論」とは一見相容れないミステリを研究対象として選択した。『十角館の殺人』出版以前のミステリにおける「文化的生産の場」の特性とその構造を明らかにするため、対象範囲は戦後から1987年までとする。上記の目的を達成するためのデータとして、日本推理作家協会賞などの限定的生産の極における審級、作家やマニアなどの発言、作品の売り上げなどの市場における指標を取り上げた。

### 3 結果

J. デュボアによる指摘を参照しながら (Dubois 1992 = 1996), ミステリは文学場の特性を備えた縮小版の「文化的生産の場」(=「ミステリ場」)を構成しつつも、独自の特性を有していることを明らかにした。とりわけ重要な相違点は、「ミステリ場」では市場での成功と2つの正統性(トリックの卓越性とリアリティ)が共存している点である。1980年代初頭の「ミステリ場」を再構成した結果、「ミステリ場」では限定的生産の極と大量生産の極の二項対立が成立し、本格ミステリが最も正統的なジャンルであった。しかし、1980年代中頃にリアリティを志向する冒険小説・ハードボイルドが、市場への依存を高めながら正統性も獲得していった。これは、読者のミステリリテラシーが高まると同時に、「ミステリ場」が市場への依存度を高めていったことで可能になった戦略である。そして、1987年にトリックの卓越性を志向する『十角館の殺人』が出版されるが、従来の本格規範における論理性やリアリティを希薄にすることでトリックの意外性を最大化するという革新性を有していた。既存のミステリマニアからは本格として不適格という批判を受けることになるが、ノベルスという安価な媒体で出版することで読者層を拡大していく。新本格は、冒険小説・ハードボイルドと同じ戦略を選択していたのであった。

### 4 結論

以上から、新本格ムーヴメントは本格復興運動に還元できない本格の定義そのものを変革していく前衛運動であり、従来の知的遊戯としてのミステリの根幹や「ミステリ場」における限定的生産の極と大量生産の極の二項対立を大きく揺るがすものであったといえる。そして、それを可能にした要因は、「ミステリ場」の市場への依存度と読者のミステリリテラシーが高まったこと、新本格の特徴を有した新人が次々とデビューしていく土壌を形成したミステリファンクラブの活動、ノベルスで新本格ミステリを出版したことの3点が挙げられる。

### 文献

Dubois, Jacques, 1992, *Le Roman Policier ou la Modernité?*, Paris: Éditions Nathan. (鈴木智之訳, 1998, 『探偵小説あるいはモデルニテ』法政大学出版局。)